

おむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用とおむつ排泄イメージの変化

木村ゆかり, 長内志津子, 福岡裕美子

青森県立保健大学 健康科学部 看護学科

要約

看護学生がおむつ排泄体験から得た学びを看護学実習で活用できたかどうかと、おむつ排泄イメージの変化について明らかにすることを目的とした。研究方法は2年次におむつ排泄体験を行った本学4年生のうち同意の得られた49名を対象にアンケート調査を実施した。その結果、おむつ排泄体験後の看護学実習でおむつ排泄体験の学びが活かされたと答えた学生は89.8%であった。活用できた主な理由は、「おむつ使用者の気持ちに共感できた」53.8%、「おむつ排泄による心理面の影響を考慮して援助できた」28.2%だった。おむつ排泄イメージは、学生はおむつ排泄に否定的なイメージを抱いていたが、2年次のおむつ排泄体験後との比較では15項目に肯定的変化が認められた。排泄ケアが人間の尊厳を守る重要なケアであることを学ぶために、おむつ排泄体験は学習の動機付けとして有効な体験学習であることが示唆された。

キーワード：おむつ排泄体験、排泄イメージ、学び、活用、看護学実習

I. はじめに

おむつは使い方次第では、高齢者の自立を助けるものである。一方で、使用による弊害もある。quality of life (QOL) の低下やactivities of daily living (ADL) の低下¹⁾、自尊心の低下²⁾など、人が長年自立して行ってきたことを他者の手を借りて行うことは人間としての尊厳にかかわる。近年核家族化が進み、若年者が高齢者に接する機会が少なくなっており、実習で初めて高齢者に関わったという学生もいた。そのような状況で受け持った患者がおむつを使用していた場合、まずおむつ交換の手技を確立することを考えるため、患者がおむつを使用している理由やおむつが患者に与える影響について気づくことが難しい。

本学では排泄援助の技術的側面だけではなく、心理面に対する援助の理解を深めることを目的に、平成26年度に看護学科2年生を対象におむつ排泄体験を実施し、体験前後のおむつ排泄イメージについて調査するとともに、おむつ排泄体験による学びを調査した(以下「先行研究」とする)³⁾。その結果、学生はおむつ排泄に否定的なイメージを抱いており、おむつ排泄体験によりおむつは不快であるというイメージを強め、適切なおむつの使用や自然排尿を促すこと、おむつ使用者の気持ちを考えた援助の重要性を感じていたことが明らかになった。おむつ排泄体験実施後、学生は多くの看護学実習を経験している。そこで、平成26年度に2年生であった卒業間近の4年生を対象に、おむつ排泄体験の学びの看護学実習への活用と現在のおむつ排泄イメージを調

査し、おむつ排泄イメージの変化はあるのかを明らかにしたいと考えた。

この調査を行うことで、おむつ排泄体験が学生の看護実践に与える影響を検討することができ、今後の老年看護学教育を考える上での一助となると考える。

本研究では、おむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用とおむつ排泄イメージの変化を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査期間

平成29年3月

2. 対象者

すべての実習が終了した本学看護学科4年生のうち、平成26年(2年次)におむつ排泄体験を行った104名。

3. おむつ排泄体験の方法

2年次配当の老年看護援助論Ⅱにおいておむつ排泄体験を実施し、おむつ排泄体験記録に記入してもらった。羞恥心への配慮として学生各自の自宅で実施してもらい、おむつを装着して排泄を試みるという課題のみ説明し、実際の排泄や、排泄後の装着などの工夫は学生の任意とした。

4. 看護学実習の修得状況

学生は1年次後期に基礎看護実習Ⅰ(2単位)、2年次後期に基礎看護実習Ⅱ(2単位)を修得し、3年次に経過別・発達援助実習Ⅰ・Ⅱ(計12単位)、地域看護学実習(1単位)、4年次に看護マネジメント

ント実習（2単位）、看護統合実習（1単位）、在宅看護実習（2単位）、ヘルスマネジメント実習（1単位）を修得している。

5. 研究デザイン

量的記述的研究

6. 調査方法

調査前に文書及び口頭で研究の趣旨・目的を説明した。その上で対象者に無記名自記式質問紙を配布し、研究協力に同意した者のみ回答してもらった。回収は中身の見えないボックスに入れてもらうか、研究者の研究室のレターボックスに提出してもらった。

7. 調査内容

1) おむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用（3項目）

①学生の性別、②看護学実習でおむつ排泄体験が活かされたかについて、「非常に活かされた」「少し活かされた」「あまり活かされなかった」「全く活かされなかった」の4件法で回答してもらった。「非常に活かされた」「少し活かされた」を選択した場合に、③その理由について、「おむつ排泄体験で感じたことを思い出した」「おむつ使用者の気持ちに共感できた」「おむつ排泄による心理面の影響を考慮して援助できた」「おむつ排泄による身体面の影響を考慮して援助できた」「おむつの必要性を考慮して援助できた」「おむつの機能性を考慮して援助できた」「その他」の選択肢から最も当てはまる1つを選択してもらった。これらの選択肢は、先行研究の結果から抽出されたものとした。「その他」は自由記述とした。「あまり活かされなかった」「全く活かされなかった」を選択した場合にその理由を自由記述で回答してもらった。

2) おむつ排泄イメージ（36項目）

おむつ排泄イメージは、梶原⁴⁾の排泄イメージの調査票を参考に研究者が作成し、先行研究と同じ項目を使用した。おむつ排泄イメージを問う質問項目は表2に示した、「きれい-汚い」「臭くない-臭い」等の意味が対になった形容詞36項目について、1点から7点までの点数で評価する。1点に近い数値ほど肯定的なイメージ、7点に近い数値ほど否定的なイメージを表す。

8. 分析方法

おむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用についてのアンケートの記入内容は単純集計した。おむつ排泄イメージ調査票は各項目の平均値を計算し、先行研究で調査したおむつ排泄体験後のおむつ排泄イメージ（以下「おむつ排泄体験後」と表記する）と比較した。データ分析にはSPSS Statistics ver.22を用い、t検定で比較した。有意水準は5%未満とした。

9. 倫理的配慮

調査説明書には、この研究への参加は任意であること、成績には全く影響しないこと、参加に同意した後も、いつでも不利益を被ることなく同意を撤回

することができることを説明した。対象者へ依頼する際、調査説明書を研究者が読み上げ研究の趣旨を説明し、質問紙の提出をもって研究への同意を得たとみなした。

取得したデータや個人情報は研究目的以外には使用しない。データは匿名化し、質問紙はデータ入力後に裁断処理して破棄する。データは研究室内の鍵のかかった棚に施錠・保管し、発表後に破棄する。発表において個人を特定できる内容は一切含まないことを説明した。また、本研究は青森県立保健大学倫理審査委員会の承認を得た。（承認番号：1646）

III. 結果

1. 対象者の属性

研究の同意が得られたのは49名で、回収率47.1%、有効回答率100%であった。性別は男性1名(2.0%)、女性48名(98.0%)だった。

2. おむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用

おむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用について表1に示した。欠損値は分析対象から除外した。看護学実習でおむつ排泄体験の学びが活かされたかについて、「非常に活かされた」9名(18.4%)、「少し活かされた」35名(71.4%)、「あまり活かされなかった」5名(10.2%)、「全く活かされなかった」0名であった。

看護学実習でおむつ排泄体験の学びが活かされたと回答したと回答した44名中、欠損値のない39名はその理由について、「おむつ使用者の気持ちに共感できた」21名(53.8%)と最も多く、「おむつ排泄による心理面の影響を考慮して援助できた」11名(28.2%)、「おむつ排泄体験で感じたことを思い出した」3名(7.7%)、「おむつ排泄による身体面の影響を考慮して援助できた」2名(5.1%)、「おむつの必要性を考慮して援助できた」2名(5.1%)であった。その他の選択肢は0名であった。

おむつ排泄体験が「あまり活かされなかった」と選択のあった回答の理由は、『すぐに体験は終わるとわかっているからずっとおむつで排泄している人の思いや皮膚トラブルはわからない』『自分の体験によってイメージが変わった感じがしない』『おむつ排泄体験を思い出す余裕が無かった』『おむつ排泄体験を実施したところで人により感じ方は異なると思う』の4件であった。

3. おむつ排泄イメージ

おむつ排泄体験後と今回調査したおむつ排泄イメージ（以下「看護学実習終了後」と表記する）の平均値とイメージの変化を表2に示した。

各項目の平均値は3点から7点の間に位置していた。看護学実習終了後のイメージ平均値がおむつ排泄体験後の平均値より高く、否定的変化があった項目は、「ざらざらした-ぬるぬるした」「軟らかい-硬い」「大切な-大切でない」「大きい-小さい」の4項目であったが、いずれも0.1から0.2ポイント差

表1 対象者の基本属性とおむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用について

質問項目	n	カテゴリー	人数	%
性別	49	男性	1	2.0
		女性	48	98.0
看護学実習でおむつ排泄体験が活かされたか	49	非常に活かされた	9	18.4
		少し活かされた	35	71.4
		あまり活かされなかった	5	10.2
		全く活かされなかった	0	0.0
		おむつ使用者の気持ちに共感できた	21	53.8
看護学実習でおむつ排泄体験が活かされた理由	39	おむつ排泄による心理面の影響を 考えて援助できた	11	28.2
		おむつ排泄体験で感じたことを 思い出した	3	7.7
		おむつ排泄による身体面の影響を 考えて援助できた	2	5.1
		おむつの必要性を 考えて援助できた	2	5.1
		おむつの機能性を 考えて援助できた	0	0.0
		その他	0	0.0

であった。イメージ平均値が同じ項目は、「太い－細い」の1項目で、それ以外の31項目はすべて看護学実習終了後の平均値がおむつ体験後の平均値より低く、肯定的変化があった。

おむつ排泄体験後と看護学実習終了後におけるおむつ排泄イメージの変化において、有意差が認められた項目は15項目であった。否定的変化としての有意差は見られず、「安心な－不安な」「日常的な－非日常的な」「誇らしい－恥ずかしい」(p<0.001)、「好ましい－嫌らしい」「親しみやすい－親しみにくい」「健康的な－病的な」「明るい－暗い」「陽気な－陰気な」「流したくない－流したい」「さわやかな－うっとおしい」「気分がいい－気分が悪い」(p<0.01)、「清潔な－不潔な」「胸が落ち着く－胸がムカつく」「触りたい－触りたくない」「快適な－不愉快な」「洗いたくない－洗いたい」(p<0.05)の15項目すべてが肯定的変化として有意差が見られた。

IV. 考察

1. おむつ排泄体験から得た学びの看護学実習での活用

おむつ排泄体験から得た学びについて、89.8%の学生が看護学実習で活かされたと回答していた。袖山⁵⁾が看護学科4年生に行った研究では、94.4%の学生がおむつ排泄体験はおむつを装着した高齢者理解に効果があったと回答しており、同様の結果が得られた。したがって、おむつ排泄体験から得た学びは看護学実習に活用できていると考えられる。おむつ排泄体験の学びが看護学実習で活かされた理由は、「おむつ使用者の気持ちに共感できた」が最も多く、次に多かったのは「おむつ排泄による心理面の影響を
考えて援助できた」であった。おむつ排泄体験を行った学生はおむつ使用者に対し共感的な理解がしやすく、患者の思いを自分のものとして感じることができたのではないかと考える。

「あまり活かされなかった」と選択した理由には、『すぐに体験は終わるとわかっているからずっとおむつで排泄している人の思いや皮膚トラブルはわからない』『人により感じ方は異なる』というものがあった。浜田⁶⁾は、排泄ケアについて『どんなに本人に成り代わろうとしても、他人のことはそう簡単にわかるものではありません。そうだと知りつつも、介護が必要になったその人がその状況を生きていることを、その人の視点に立って探ってみる。そこから感じられるもの、みえてくることがあります』と述べている。一度の体験ですべてのおむつ使用者の心情を理解することは困難であるが、おむつ排泄体験によって、学生は今まで自分とは関係が薄いと考えていたおむつ排泄を自分のものとして捉え始める。そして看護学実習でおむつ使用者に接した際に、相手の視点に立とうとする姿勢が生まれ、対象者をより理解することにつながるのではないだろうか。これは排泄ケアのみならず全てのケアにおいて活用できる重要な視点である。

2. おむつ排泄イメージ

看護学実習終了後の得点の平均値は全て3点から7点の間であり、全体的に否定的なイメージに傾いていた。梶原⁷⁾の研究では、便のイメージ得点の平均値は2点から5点の間に位置し、尿のイメージ得点の平均値は便のイメージより肯定的なイメージに変化していた。このことから、学生は看護学実習終了後もおむつ排泄について通常の排泄より否定的なイメージを持っていると考えられる。しかし、おむつ排泄体験後と比較すると看護学実習終了後のイメージ得点は31項目の平均値がおむつ排泄体験後より低下し、肯定的変化があった。また、15項目に有意差がみられ、その全てが肯定的変化であった。学生はおむつ排泄体験後に多くの講義・演習や看護学実習などを経ており、この約2年間に何らかの意識の変化があったのではないかと考えられる。市丸⁸⁾は、看護学生に対し排泄のイメージや排泄援助

表2 おむつ排泄体験後と看護学実習終了後におけるおむつ排泄イメージの平均値とイメージの変化

選択項目	おむつ排泄体 看護学実習終		イメージの 変化	t 検定
	験後の 平均値 (n=82)	了後の 平均値 (n=49)		
きれい-汚い	5.4	5.0	○	
臭くない-臭い	5.3	5.1	○	
好き-嫌い	6.1	5.9	○	
価値のある-価値の無い	3.5	3.3	○	
良い-悪い	4.5	4.0	○	
清潔な-不潔な	5.4	4.9	○	*
上品な-下品な	5.0	4.7	○	
見せたい-隠したい	6.7	6.3	○	
見たい-見たくない	6.1	5.7	○	
胸が落ち着く-胸がムカツク	5.4	5.0	○	*
触りたい-触りたくない	5.9	5.5	○	*
快適な-不愉快な	6.0	5.5	○	*
好ましい-嫌らしい	5.4	4.7	○	**
親しみやすい-親しみにくい	5.5	4.8	○	**
安心な-不安な	5.6	4.6	○	***
健康的な-病的な	5.4	4.8	○	**
明るい-暗い	5.4	4.8	○	**
陽気な-陰気な	5.4	4.8	○	**
日常的な-非日常的な	5.6	4.5	○	***
ざらざらした-ぬるぬるした	4.7	4.8	▼	
重い-軽い	3.1	3.0	○	
温かい-冷たい	3.9	3.8	○	
軟らかい-硬い	3.3	3.5	▼	
力強い-弱々しい	4.7	4.5	○	
太い-細い	4.1	4.1		
洗いたくない-洗いたい	5.5	4.7	○	*
流したくない-流したい	5.9	5.0	○	**
しゃれた-やぼったい	5.5	5.2	○	
大切な-大切でない	3.4	3.5	▼	
さわやかな-うっとおしい	5.5	4.9	○	**
さっぱりした-ねっとりした	5.1	5.0	○	
大きい-小さい	3.6	3.7	▼	
気分がいい-気分が悪い	5.8	5.2	○	**
すっきりする-すっきりしない	5.8	5.3	○	
重要な-重要でない	3.4	3.0	○	
誇らしい-恥ずかしい	6.2	5.1	○	***

○:肯定的変化 ▼:否定的変化 * :p<0.05 ** :p<0.01 空欄:n.s

への思いなどを調査した結果、学年の進行につれて「汚いイメージ」の記載が減少し、「排泄の意義」についての記載が増加しており、講義や演習による患者役の体験により排泄の意義がより意識されたと述べている。後藤ら⁹⁾は、介護福祉士養成課程の学生に排泄介護の経験や意識を調査した結果、実習経験や学習経験とともに排泄介護の生理機能的観点での必要性の理解が深まり、排泄介護に対する抵抗感や否定的イメージが少なくなったと述べている。調査対象の学生は、高齢者の排泄ケアについて、2年次の老年看護援助論Ⅰ・Ⅱの講義で排泄の意義や排泄障害の分類、適切な排泄ケア方法の選択から排泄

物の観察・アセスメントや患者の安全・安楽、残存機能の保持など多くの視点を持って援助する重要性を学んでいる。学生は実習を重ねるにつれて排泄ケアの手技に慣れるとともに、講義で学んだような広い視点を持って援助できるようになる。また、おむつの適切な使用がQOLの維持向上につながっている患者を目にしたり、実習施設で実施している工夫を学ぶ。これらのことから、おむつ排泄に対するイメージが肯定的な変化をきたしたのではないかと考える。

3. おむつ排泄体験の意味

先行研究では、学生はおむつ排泄体験前後ともお

むつ排泄に否定的なイメージを抱いていた。おむつ排泄体験によっておむつ排泄への抵抗感、排泄後の不快感などを実際に経験したことで、適切なおむつの使用やおむつ使用者の気持ちを考えた援助の重要性を感じると同時に、排泄後に排泄物の漏れがなく安心感が得られたことから、おむつの有用性を考えることもできていたと考えられる。

今回の調査では、ほとんどの学生がおむつ排泄体験の学びが看護学実習で活かされたと回答していた。おむつ排泄体験で感じたことを看護学実習で患者へのケアに活かした結果、おむつ排泄イメージが肯定的に変化したと考えられる。学生はより良い排泄ケアの手段としておむつ排泄を考えることができるようになり、意識の変化が起こったのではないかと考えられる。袖山ら¹⁰⁾は、おむつ排泄体験はおむつ内排泄を余儀なくされた高齢者の気持ちや不快感の理解だけでなく、高齢者の排泄援助における看護を考えるきっかけにもなっていると述べている。これらのことから、おむつ排泄体験は排泄ケアについての学習の動機付けとして有効な体験学習であると示唆された。しかし、おむつ排泄体験は学生自身の羞恥心や自尊心に影響を与える可能性がある。田中ら¹¹⁾、板橋¹²⁾の報告でも学生の心理的特徴や人権を尊重した実施の検討について述べられており、青年期の学生の心情や倫理面を考慮する必要がある。

V. 結論

学生はおむつ排泄体験で得た学びを看護学実習において活用することができ、おむつ排泄体験後から看護学実習終了後までにおむつ排泄イメージが肯定的に変化していた。おむつ排泄体験は、学生が高齢者へのより良い排泄ケアを学び、看護を実践するための動機付けとして有効な体験学習であると示唆された。

VI. おわりに

今回の調査ではおむつ排泄イメージが肯定的に変化していたが、その理由までは明らかにされていない。どのタイミングでおむつ排泄イメージが変化するのか、その理由について全学年を通して調査すること、また、おむつ排泄体験を実施するのとししないのではその後の排泄ケアへの学習に違いがあるのかを調査することも有用であると考えられる。

卒業式直前の忙しい時期に調査にご協力いただいた学生の皆様に、深く感謝申し上げます。

VII. 引用文献

- 1) 渥美京子：おむつを減らす看護・介護 おむつに頼らない高齢者の看護・介護マニュアル，田中とも江監修，医学芸術社，16，2003
- 2) 梶原睦子：排泄の心理学，穴澤卓夫，後藤百万，高尾良彦ら編，排泄リハビリテーション理論と臨床，中山書店，24，2009
- 3) 木村ゆかり，吹田夕起子，長内志津子ら：看護学

生のおむつ排泄体験による意識の変化とおむつ排泄イメージの変化，青森県立保健大学雑誌，第17巻，29-35，2017

- 4) 梶原睦子，根本秀美，高橋知勢子：人は便をどのようなイメージで捉えているか，日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌，11(1)，34，2007
- 5) 袖山悦子，佐藤信枝：老年看護学実習における看護学生のおむつ装着体験の効果，ヘルスサイエンス研究，19(1)，19-23，2015
- 6) 浜田きよ子：基礎から学ぶ介護シリーズ 自立を促す排泄ケア・排泄用具活用術，中央法規出版，10-11，2010
- 7) 4)と同じ，34
- 8) 市丸訓子，永峰卓哉，中村恵子：看護学生の排泄の援助に関する研究-排泄に対する思いの分析から-，日本看護研究学会雑誌，25(3)，171，2002
- 9) 後藤満枝，内野秀哲：実習体験が学生の排泄介護意識に与える影響，仙台大学紀要，46(2)，47-59，2015
- 10) 5)と同じ，19-23
- 11) 田中美江，河原畑尚美，平尾由美子ら：「排尿機能低下のある高齢者の援助」の理解のための教育方法の効果-その2 学生の「おむつ排尿体験時の困ったこと，心配・不安だったこと」のレポート分析から-，北日本看護学会誌，14(2)，11-19，2012
- 12) 板橋和子：老年看護学におけるオムツ着用体験学習の効果，東京医科大学看護専門学校紀要，16(1)，55-61，2006